

イエスは主です

コリント第一 12:1~3

今年も残すところあと一ヶ月と少しになり、来年のカレンダーを用意する時期になりました。本屋さんに行くと、日記と共に数多くのカレンダーが売られています。一般のカレンダーでは一年は1月1日から始まりますが、教会のカレンダー（教会暦）は、一般のカレンダーよりも早く、クリスマスの四週前のアドベントから一年が始まります。つまり来週からですね。来週はいよいよアドベントですから、きょうは教会暦の最後の日曜日です。この日は「王なるキリストの主日」と呼ばれ、イエス・キリストが「王」であることを覚える日とされています。王は王でも神の国の王です。「イエスは主である」ということと「イエスは王である」とは密接なつながりがあります。クリスチャンは「イエスは私の主です」と告白する者ですがイエスは王であることも含めて「主」ということの意味を考えたいと思います。

1) イエスは神

コリント第一 12:3 に「イエスは主です」ということばがあります。これは、クリスチャンの信仰を言い表わしたことばの中で、一番短いものです。ローマ 10:9 にあるように人は「イエスを主と告白し…救われ」ます。そして、救われた者がともに集まって「イエスは主です」と言って、主イエスの前に膝をかかめるのが、クリスチャンの礼拝です。

しかし、「イエスは主です」と言う場合、「主」という言葉にはどんな意味があるのでしょうか。それは、第一に「神」という意味があります。

神はさまざまな呼び名で呼ばれますが、多くの場合、「ヤーウェ」というお名前で呼ばれています。これには「わたしは有って有る者」という意味があります。このお名前は、神があらゆるものの存在の根源であるということを表わしています。自分の意志でこの世に生まれ、自分の力だけで生きている人は誰もいません。私たちは皆、自分以上の意志と力によってこの世に生まれ、生かされています。重い病気の後やっと回復した人、また、大きな災害から救い出された人たちのほとんどが「私は今まで、自分で生きていると思っていました。でも、ほんとうは生かされていたんですね」と口を揃えて言います。そのとおりで、人は神によって造られ、生かされているのです。神がその手を少しでも引っ込められたなら、私たちはたちまち消えさってしまうのです。人は「有って無きがごときもの」です。しかし、神は何ものによっても支えられる必要のない、「有って有るお方」です。

ユダヤの人々は、この神のお名前をそのまま口にするのは恐れ多いと考えて、「ヤーウェ」のお名前があるところを「わが主」という意味の「アドナイ」という言葉で読み替えました。それで、ヘブル語聖書がギリシャ語に翻訳されたとき、「ヤーウェ」と書かれていたところはギリシャ語で「キュリオス」（「主」）となりました。キリストの使徒たちが、イエス・キリストの福音を伝えた時代はギリシャ語が共通語で、使徒たちはギリシャ語聖書を使い、そこから引用しました。使徒たちはヘブル語で「ヤーウェ」とある箇所を引いて、イエスこそ主、神であると説いたのです。主イエスは神なるイエスということです。

聖書にはイエスご自身が「わたしはヤーウェである」と言っておられる箇所があります。ヨハネ 8:58 です。そこには、「まことに、まことに、あなたがたに言います。アブラハムが生まれる前から、『わたしはある』なのです。」とあります。イエスはユダヤ人として生まれました。ですから聖書はイエスを「アブラハムの子」と呼んでいます。しかし、イエスは、二千年も前のアブラハムのその先からおられたのです。イエスは、母マリヤの胎内に宿ったときにいのちが与えられ、存在するようになったのではなく、はじめから存在しておられたのです。イエスが言われた「わたしはある（いる）」ということばは、神が「わたしは有ってある者」と言われたのと、同じ意味です。イエスはご自分が旧約時代に「ヤーウェ」の名で呼ばれた神であることをはっきりと示されたのです。「イエスは主です。」これは第一に、イエス神であることを教えています。信仰を求めている方々がイエスが神であることを知り、「イエスは主です」との告白に導かれますよう、心から祈ります。

2) イエスは人生の主

「イエスは主です」このことばは第二に、イエスが私たちの人生の主人であることを教えています。

神はあらゆるものの主権者です。すべてのものを思いどおりに治める権利を持っておられます。そして、イエスが神であるなら、イエスは、私たちを支配される主です。イエスを神と信じることは、同時に、イエスを自分の人生の主人として受け入れること、自分をしもべの立場に置いてイエスに従うことなのです。「主」という言葉は聖書では、「主」という言葉は、ほとんどの場合、「主権者」という意味で使われています。

使徒パウロは、自分を「キリストのしもべ」と呼びましたが、その「しもべ」という言葉に「奴隷」という言葉を使いました。「私はキリストの奴隷だ」と言ったのです。当時奴隷は主人の所有物でした。奴隷を生かすも殺すも主人次第でした。パウロは、かつては罪と死の奴隷であった自分が、イエス・キリストによって解放され、自由になったことを知っていました。しかし、その自由というのは、好き勝手なことをする自由ではなく、人を罪の奴隷から買い戻すためにご自分の命という尊い代価を払ってくださったイエス・キリストに仕える自由なのです。ですから、パウロは、みずからを「奴隷」と呼び、イエスを「主」と呼んで、自分の人生の主権者であるイエス・キリストに仕えたのです。自分がキリストの奴隷、つまりイエスの所有物であることを恥じるどころか、それを誇ったのです。

イエスを神として信じることと、イエスを人生の主として従うこと、このふたつのことは切り離すことはできません。もし、人が「イエスには、私を守ってくれる神であってほしい、でも、私は、私の思い通りの人生を送りたい。イエスといえども、私に命令したり、指示したりして欲しくない」と言ったとしたら、それは、矛盾したことを言っていることになります。イエスに従うのではなくイエスに従わせようとしているのかもしれませんが。もしかしたら、その人は、イエスをほんとうに神として信じているのではなく、イエスを、気落ちしたときに慰めてくれる「お友だち」、あこがれと希望の対象であるアイドル、寂しさをまぎらわしてくれるマスコット人形のようにしているだけなのかもしれません。それでは本当の信仰ではなく、偶像礼拝になってしまいます。

もちろん、真実な信仰者であっても、イエスが自分の人生の主人であることが分かっても、その通りに生きられないことがあります。この世に生きる限り、誘惑があり、迷いがあります。疑いを持つこともあるでしょう。イエスを自分の心の王座に迎えたはずなのに、いつしか、自分が再びその王座に座ってしまっているというようなことがあるかもしれません。しかし、真実な信仰者は、イエスを神としながら、イエスを主としていない矛盾、イエスを「主」と呼びながら、自分をしもべにしていないことにいつか必ず気付くはずで、あるいは気づかされます。物事が自分の願っているように進まないのは他人ではなく自分に問題があることに気づかされるかもしれません。いつも後付けで教会のために、福音のためと言いつつ、その場しのぎの信仰生活を送っているのかもしれませんが。かつて私がそうでした。その矛盾に苦しみ、その間違いを悔い改め、「イエスは主なり」と告白して、新しい歩みを始めます。そうやってイエスが自分の人生の「主」であることが、どんなに、平安で、力強く、喜びに満ちたものであるかを体験していくのです。この信仰の喜びを体験し続け、「イエスは主なり」と告白し続けていきたいと思いません。

3) イエスは世界の王

「イエスは主です」これは、第三に、イエスは神の国の王であることを教えています。

聖書が書かれた時代には、皇帝、王、領主たちが世界に君臨し、国を支配し、地域を治めていました。今でも王さまがいる国はあります。国王、女王ということばが今でも使われています。ですから、イエスが「王」であることは、まったく、時代離れた、理解できないことではありません。

イエスは、王としてこの世においでになりました。イエスの誕生されたとき、東方の博士たちは「ユダ

ヤ人の王」として生まれたイエスに黄金、乳香、没薬の贈り物を捧げて、その前にひれ伏しています。イエスは、ローマ総督ピラトの前でも、ご自分が王であることをはっきり告げられました（ヨハネ 18:33-37）。イエスは神の国の王として来られたのです。

しかしイエスの国は、アメリカや中国などのような目に見える国ではありません。イエスの国に国境はありません。人種の区別もありません。それは、戦車や大砲、核兵器の恐怖によって成り立っている国ではありません。平和のうちに、愛によって支配される国です。そこには、貧富の差も、強い者と弱い者の差もありません。みんなが平等で、自由です。一部の為政者、民衆の声が支配するところではなく、キリストのことばが支配するところです。その国は王国であり、王はイエス・キリストです。王であるキリストが治める国、それは豊かで、完全で、栄光に満ちています。

この国はまだ来ていません。しかし、必ず来ます。そのときにはアメリカの大統領も、中国の首相も、すべての王たちや女王たちも、王であるイエス・キリストの前にひれ伏すでしょう。先日のエリザベス女王の葬儀もそこで褒めたたえられたのは神の国の王なる主イエスです。集まった多くの首脳と王が賛美を捧げ、祈りに頭を垂れたのは女王ではなく神なる主イエスです。女王は神から委ねられた国民のために神の僕として忠実に仕えたということです。来るべき神の国の姿をあらわしているようにも思えました。神の国の到来。私たち、信仰者たちはそのときを待ち望んでいます。だからこそ、世界がどんなに暗くなり、混乱しても恐れません。その中で「イエスは主なり」と告白して、王なるイエスを待ち望むのです。

次週からアドベント（待降節）に入ります。私だけかもしれないがクリスマスの賛美は毎年同じなのですがどうしてもいつも美しい賛美として、聞こえてくるのかなと思います。何年経っても、何回聞いてもクリスマスの賛美って良いなと思います。今までも、そしてこれからも世界がどのように変化しよう、何が起きたとしても美しいクリスマスの賛美は歌われてゆくでしょう。そしてクリスマスの賛美が伝えていることは「あなたのために救い主イエスが誕生されました。イエスは主です。このお方を信じるならあなたも救われる」ということです。

今年を振り返ると社会で、そしてあなた自身の人生にもいろんなことが起きたことと思います。世界は聖書に預言されているように、国と国とがぶつかりあい、民族と民族が争うようになっています。科学技術が進んで便利な世の中にはなりましたが人のモラルが低下して、たいした理由もなく人を騙したり、傷つけたり、殺したりと恐ろしい犯罪が増えています。自然環境が破壊され、ストレスがいっぱいの社会で、メンタルな問題を持つ人が増えています。平和な方向に向かっているようには思えません。しかし主イエスが王である神の国は到来します。その時、神は裁き主、慰め主として来られます。私たちはイエスの御国が来ることを信じ、この神の国の福音を伝えるのです。「イエスは主です」この信仰がすべての人に伝えられ、人々が王なるキリストを迎える備えができるよう、祈り続けていきましょう。